

私は 2011 年 6 月からの 1 か月間、カナダのトロントにある The Hospital for Sick Children (SickKids) にて研修させて頂きました。私が海外研修を希望したのは世界トップクラスの医療を体験することが自分自身を高める良い機会だと思ったからです。もちろん不安もありましたが、以前 SickKids で研修された近藤先生・加藤先生から非常に有意義な研修であったとうかがい、行きたい気持ちはより強くなりました。また、同期の服部先生と一緒に研修に参加することになり共に英会話学校に通うなど、研修の準備を進めました。

小児科学教授の尾内一信先生が SickKids の臨床薬理学部門教授の伊藤信也先生と以前から御親交があることから臨床薬理学部門にて研修させて頂くことになりました。臨床薬理学部門の業務は、他科や他施設からのコンサルテーションに見解・アドバイスを提示して対応することです。コンサルテーション内容は薬物の副作用や血中濃度に関することなど薬剤全般にわたります。また臨床薬理学部門内にはマザーリスク (Motherisk) 部門があります。この部門は、妊娠・授乳中である母親の薬の服用に関することに対して診察・研究を行っています。このマザーリスクという考え方は世界中で重要視されつつあり、日本でも国立成育医療センターを中心に広まりつつあるといえます。我々はこの臨床薬理学部門で temporary observer として研修させて頂きました。observer とは見学者のことであり、基本的に医療行為は行うことができませんが、ラウンド・カンファレンス・外来・治験など積極的に参加しました。臨床薬理学部門のスタッフはロシア・インド・韓国・日本など文字通り世界中から集まっています。みなさんととてもフレンドリーで気軽に話しかけてくださるし、外来では症例ごとにしっかり説明してくださいました。また日本人の先生も多くおられるため英語では理解できなかった点などを日本語で質問できるので非常に恵まれた環境だと思います。しかし研修が始まった当初はネイティブ・スピーカーのとても速い発音が聞き取れず苦労しました。そこで、講演会は比較的丁寧にゆっくりと話されるので、空き時間を見つけては SickKids や関連病院での講演会に参加して耳を慣らしました。徐々に聞き取れるようになった研修の最終週には、実際にコンサルテーションの症例をまとめて英語でプレゼンテーションを行う機会を頂きました。もちろん英語の症例発表は初めての経験ですので、実際に患者さんに話を聞きに行き現病歴をまとめるのでさえ一苦労でした。また発表前には服部先生と何十回も読み合わせを行ったり、文法のチェックを行いました。先生方にいろいろと手助けをして頂いたこともあり、何とかプレゼンテーションを行うことができました。この研修の中で最も大変でしたが、その分一つの自信につながりました。

トロントはカナダ最大の都市であり、多民族が暮らす街として有名で、チャイナタウン・

コリアンタウン・リトルイタリー・グreekタウン・ポーランド人街など様々な文化に触れることができます。治安もよく、料理もおいしくとても素晴らしいところでした。またメジャーリーグのトロント・ブルージェイズの本拠地であり、週末にはホットドック片手に野球観戦などをして楽しみました。

SickKids は臨床もしくは研究に集中できる環境があり、さらに専門性が細分化されており本当に自分がやりたいことをしっかりできる素晴らしい病院だと思いました。このような環境に惹かれて世界中から優秀なスタッフが集まるのだと思います。また、SickKids で出会った先生方はみな高いモチベーションを持たれており教育熱心で、尊敬できる“良医”でした。今回の海外研修で得た刺激的な経験を基に、日々の診療に励みたいと思いました。そして再び留学し勉強したいと思います。

今回 SickKids での研修を始めるにあたって、様々な場面でご尽力くださった小児科の尾内一信教授には大変感謝しております。また、研修を受け入れてくださった伊藤信也教授には大変御世話になり御礼を申し上げます。最後になりましたが、このような機会を与えてくださった、レジデント教育委員長の柏原直樹先生、プログラムディレクターの長谷川徹先生、角田司病院長先生、植木宏明学長先生、川崎明徳理事長先生をはじめとする川崎医科大学附属病院関係者の皆様には大変感謝しております。有難うございました。



分かりづらいですが、壁にスローガンである“Together We Will”と書かれています。



開放的で広い病院内の様子



臨床薬理学部門専用の治験室。
専属のナースもいます。



研究の様子。公私ともにお世話になった Dr.Reo